

平成 2 6 年 6 月 8 日現在

機関番号 : 3 3 9 3 5

研究種目 : 若手研究(B)

研究期間 : 2010 ~ 2013

課題番号 : 2 2 7 3 0 4 2 0

研究課題名 ( 和文 ) アーレントの全体主義論の独創性とその思想的展開に関する社会学的研究

研究課題名 ( 英文 ) A sociological study about the originality of Arendt's totalitarianism and its development of her philosophy

研究代表者

高橋 陽子 ( Takahashi, Yoko )

名古屋産業大学・環境情報学部・准教授

研究者番号 : 4 0 3 8 7 9 0 7

交付決定額 ( 研究期間全体 ) : ( 直接経費 ) 1,600,000 円、( 間接経費 ) 480,000 円

研究成果の概要 ( 和文 ) : アーレントの全体主義論の独自性を明らかにすることが研究の第一の目的である。それによって、『全体主義の起原』以降の、『人間の条件』をはじめとする彼女の著作の主要概念である、「活動」、「競技精神」、「多数性」、「始まり」、「ノモス」、「連帯」などが内包する意味内容を、テキストを忠実に読解することによって明確に定義し、アーレントの思想の体系化を目指した。学会発表、論文は以下のとおり。" H. Arendtにおける「社会問題」"、" Hannah Arendtの思想における『全体主義の起原』の意義"、" 哀れみと親密圏"、" ハンナ・アーレントにおける「公開」"。

研究成果の概要 ( 英文 ) : The purpose of this study is to make clear the originality of Hannah Arendt's totalitarianism. As the result, I can give clear definitions of the words after "The Origins of Totalitarianism" such as "activity", "agonal spirit", "plurality", "beginning", "nomos" and "solidarity" which are the main concepts of her works including "The Human Condition". The goal of this study is to systematize Arendt's philosophy. My papers are as follows; " Hannah Arendt's Concept of 'Social Question'", " The Significance of 'The Origins of Totalitarianism' in Hannah Arendt's Philosophy", "Pity and the Sphere of Intimacy" and "The Significance of 'Publicity' in Hannah Arendt's Philosophy".

研究分野 : 社会科学

科研費の分科・細目 : 社会学

キーワード : アーレント 全体主義 思想

### 1. 研究開始当初の背景

国内の研究動向における通説は、ハーバースの理論のフィルターがかかったアーレント論であり、それに対する本研究の位置づけは、あくまで『全体主義の起原』を基軸に、テキストに忠実にアーレントの概念の定義を試みるものである。

### 2. 研究の目的

先行研究において、ユダヤ人であるアーレントが『全体主義の起原』を執筆したことは自明視されており、そのこと自体は論点にされてこなかった。

本研究の目的は、彼女を執筆に駆り立てた動機、そして語り、記録に残し後世に伝える「公開」の重要性になぜこだわり続けたのかを軸に、アーレント＝公共性という通説を覆すことである。

### 3. 研究の方法

アーレントを育んだドイツ人文主義文学の講読、および哲学、特に、ハイデガーの『存在と時間』・『ニーチェ』、フーコーの『監獄の誕生』・『知の考古学』の読解を行う。それをとおしてアーレントの思想的背景を探求する。さらに、ここ数年で国内外で出版が相次いでいるアーレント関連文献の読解、国内外学術論文を検討する。

アーレントの著述の特徴は、読者にそれと気付かないような伏線が多く張られている点である。これは、学術研究と文学という違いはあれ、ブルースト『失われた時を求めて』の記述の仕方と酷似している。また、『全体主義の起原』の文章には、『失われた時を求めて』に書かれている内容の反映が数多くあり、ブルーストの読み直しが、『全体主義の起原』の理解を深める上で大いに寄与した。

さらに、アーレントは、作品を明記せず、様々な文学作品を念頭に置いた著述の仕方をしている。したがって、アーレントが読んだであろうドイツ人文主義で教養とされた文学作品を読み進め、研究に活かす方法は、他の先行研究には見られない研究方法である。

アーレントの文章には、著作が明記されている場合でも、同じ著者の他の文献を念頭に置いていると思われるところが多々ある。例えば、彼女はマキャベリを高く評価しており、『君主論』の内容に触れているようでいて、『政略論』を論じていると考えられる箇所が見られる。アダム・スミスについても同様で、『国富論』の名は出しているが、「道徳感情の理論」は、文章の内容から推測するしかない。アーレントの本心がどこにあったかを探求していく方法をとることが本研究には必要であった。

### 4. 研究成果

『革命について (On Revolution) 』におい

て、「創設 (Foundation)」の章の前に、なぜ「社会問題 (The Social Question)」もっと端的に言えば貧困の問題を詳述しているかを検討した。そのうえで、アーレント自身の見解が明示されていない「社会問題」の具体的な解決策を、彼女が実のところどのように考えていたかについて、私なりの解釈を示した。

今日、雇用、住居、教育、医療、福祉、貧困といった様々な問題を政治問題とみなすことにに関して、ほとんどの人びとはそれを当たり前のことだと考えている。

これは今に始まったことではなく、アーレントによれば、フランス革命で革命政権が貧困の問題に直面したとき以来、「政治問題」とは「社会問題」をさすようになり、政治の本来の目的、「自由の創設」と「永続的な制度の樹立」は、政治から遠ざかっていったしまった。

それをふまえて、「社会問題」に関する彼女の考察の限界、さらには、「社会問題」をあくまで前政治的課題と位置づけることの意義について、私自身の見解を提示した。

ハンナ・アーレント著『全体主義の起原』が、その後に執筆された『人間の条件』や『革命について』といった思想的著作の基底をなしているという視点にたつて、『全体主義の起原』の意義を示した。

こうした見解を提起することに対しては当然異論が出されている。『全体主義の起原』に、「人間の複数性の徹底的な擁護と「世界への愛」、政治思想家ハンナ・アーレントの基本的主張はすでに準備されていた」(川崎修 2000:190)と思想的萌芽をある程度認めつつも、「起きてしまった現実の理解・解釈」(同:355)であって、現代社会の問題との直接的な関わりは否定されている。より端的には、「彼女の政治思想をすべて「全体主義」の経験によって説明することは、そもそもその「経験」自体が一定の理論的枠組みを前提としているという論理的な理由は別にしても、必ずしも適切なアプローチとは思われない」(川崎 2010:7)という主張によって示される。つまり、亡命ユダヤ人であるアーレントの特異な立場は、全体主義を論じるうえでは有効だが、思想的著作に関連づけることは、彼女の思想を誤ってとらえかねない、という指摘である。

あるいは、「全体主義が否定したものを反転させて政治のポジティブな側面を引き出すことにその後の彼女の関心が向けられていくことになるが、すでに全体主義論のなかでその方向性は示唆されていた」(寺島俊穂 2006:191)とはいえ、『全体主義の起原』においては全体主義の歴史的理解に主眼が置かれ、ているのであって、自由な人間の活動を論じるためには、「特定の時代に限定されずに人間一般の営みとしての政治を捉え直す」(同:193)ことが必要とされ、ここでも、『全体主義の起原』と一定の距離をおいて彼女の思想を解釈しようとする姿勢が見られる。

それでも、『全体主義の起原』をアーレントの思想の原点とする視点にこだわった。なぜなら、己の価値観、人間観が激変するような経験は、その痛みが、人の魂に深く刻印され、その人のものの考え、感じ方にその衝撃の印が刻まれるからである。そえゆえ、『全体主義の起原』の文脈を理解しなければ、その後のアーレントの著作を読み解くことはできないと考える。そうした立場に立ったときに見えてくる、アーレントの思想の一端を示した。

行為者は受難者である。しかも現実が悲惨であればあるほど、たとえ語られ、記録に残されたとしても、語り続けられないかぎり、時とともに「生きた精神」が失われ「死んだ文字」となり、忘れ去られる。「死んだ文字」ととどまるかぎり、人間が、未来において同じ過ちを繰り返すことを阻止する力をもて得ないのである。

行為者 殺害された人々 は、自らがどのように語られているか、もしくは、己の身に起こったことが知られているのかいないのかすら知り得ないという受難を引き受けなくてはならない。行為者本人は、後に語られた内容を知ることができないのである。行為者の記録は、彼らの死後、つまり彼らが過去になった時に初めて完成する。アクターにできるせめてもの抵抗は、自分が何者であるかを言論で補うことのみであるが、それが後の人々にどう伝えられるのかを決して知り得ない境遇におかれているのである。

もし、受難の物語が記録されず、他者によって問い直されることがなければどうということになるか、公然の秘密であった強制収容所がそれを如実に示している。

正常な世界に生きる人間は、想像を絶する犯罪を知らされたとき、それが現実であったこと、事実であることに深い猜疑心をもってししまうのである。さらに、実際に殺害に関わった者の良心を麻痺させる心の作用が「哀れみ」であるといえる。「哀れみは、肉体的に打ちのめされることなく、その感情的距離を保っているから、同情がいつも失敗するところで成功を収めることができる」(Arendt [1963]1990:89)ゆえに「徳の源泉と考えられた哀れみは、残酷さよりも残酷になる能力を持っている」のである。

距離を隔てた関わりしかもたない人にとって、他者の苦しみは、自分も同じ苦しみを感じることはつながらず、その苦しみを終わらせることが救いだとは人々考えるようになる。「許すべからざる罪は人々を殺すことではなく不必要な苦しみを与えることだ」(Arendt [1963]1994:109)という考えが心に根を下ろし、「慈悲によって死なせる」(同:108)ことが人々への福音だと信じたことがフランス革命を恐怖政治へ、ナチズム・スターリニズムにおける強制収容所の大量殺戮へと導いたのである。

ユダヤ人であるという出自が、アーレント

にとって重大な意味をもっていたという認識の上に立って、彼女が用いる概念の解釈を試みた。特に着目したのは、「哀れみ(pity)」と、「親密圏(the sphere of intimacy)」あるいは「親密さ(intimacy)」である。これらの概念をアーレントがどう定義したかを明確にすることによって、『全体主義の起原』の思想的展開として、その後のアーレントの著作を位置づけることができると考えた。

アーレントにおける親密圏は、近代社会が個々の人びとに押しつける画一化の要求に対する対抗軸として「発見」されたとする。しかしその一方で、個性の発露が私生活において求められるようになるとともに、私生活における友人との関係には、様々なルールが適用される関係へと姿を変え、対等でない関係へと親密圏が変容していったと考えられる。

アーレントが親密圏を否定的に評価していたという見解にたち、『全体主義の起原』および『人間の条件』に描かれているサロンが、その具体的な例であると考えた。

『全体主義の起原』が、アーレントのその後の思想的基底をなしているという観点に立って、彼女の思想における公開と「公開性(publicity)(Arendt [1951]1976 : 213),(Öffentlichkeit)Arendt [1968]1986:(2)455)」についての探求を試みた。

なぜ公開に焦点をあてるのか。それは、全体主義体制の支配が、市民には決して知らされない、非公開の政令をふりかざす秘密警察によってなされ、秘密警察への恐怖が市民から自発性を奪っていたからである。それ以上に、公開 誰にたいしても開かれていることは、自らの個性を表す機会、競技的精神の発露の場でありながら、ユダヤ人にはそれが閉ざされ、自らの才覚を示すことも、人間の尊厳の要求という当たり前のことすらユダヤ人には開かれていなかったからである。

「首尾一貫」して社会の余計者、劣等人種と不当に決めつけられ、命の危険にさらされた者にとって、自らを守るほぼ唯一の手段は、「優越人種」にたいして、誰もが見知ることのできる公開の場で、誰にでもわかるよう実力の差を見せつけ、生き延びる可能性にかけしかない。ただし、アーレントが競技的精神を論じているのは『人間の条件』であり、虐げられた人々と直接関連づける叙述の仕方はしていない。しかし、ユダヤ人は、苦痛と困難のなか、社会に受け入れられるために努力してきた民族である。「反ユダヤ主義」において「同化ユダヤ人」が抱える矛盾を描いているアーレントが、競技的精神に、迫害された民の名誉の回復という側面をもその考察に含めていたと推察できよう。

くわえて、全体主義支配は、ユダヤ人を公開の場から閉め出したのみならず、非公開の政令でもって、強制収容所へ連行した。民主

国家であれば、決定事項はすべて人々に周知させるべく公開される性質をもつことが前提される。しかし、全体主義国家の政令は、こうした公開性が適用されない。秘密に覆われた社会では、どれほど残虐なことが行われていても、沈黙がその現実を覆い隠してしまうのである。また、事実の歪曲にも秘密が大きく関与する。「全体主義的独裁は、足場を固めてしまうや否やイデオロギー教義とそこから生まれた実際上の嘘を本物の現実に変え」(Arendt [1951]1976:341)、そこで力を発揮するのが秘密警察、それだけでなく一般市民までが匿名の密告を進んで行いテロルの担い手となった。

公開されるべき事柄は何か、プライバシーとして秘されるべき事柄は何であるかをとり違えると、社会に起こってはならないこと、すなわち全体主義という、人間の本性を脅かす事態を引き起こしてしまうのである。

『全体主義の起原』がアーレントの思想の原点であるという立場に立って、アーレントと公共性をめぐる議論、さらに、公開・公共性・親密圏がどう関係しているかをめぐって、アーレントの全体主義論から、彼女の思想がどう理解できるかについての考えを提示した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

高橋陽子、ハンナ・アレントにおける「公開」、名古屋大学社会学論集、32 巻、査読有、pp121 - 132、2012 年。

〔学会発表〕(計 3 件)

高橋陽子、Hannah Arendt における「社会問題」、第 83 回日本社会学会大会、名古屋大学、2010 年。

高橋陽子、Hannah Arendt の思想における『全体主義の起原』の意義、第 84 回日本社会学会大会、2011 年。

高橋陽子、哀れみと親密圏、第 86 回日本社会学会大会、2013 年。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

高橋陽子 (TAKAHASHI, Yoko)  
名古屋産業大学・環境情報学部・准教授  
研究者番号：40387907

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：